

事後評価調書
【道路事業】

土木局地域道路室

事後評価調書

部課室名	県土整備部土木局 地域道路室	記入責任者職氏名 (担当者氏名)	地域道路室長 中村 誠 (県道係長 松田 智)	内線	4362 (4376)
------	-------------------	---------------------	----------------------------	----	----------------

事業種別	道路	事業名	道路改築事業	事業主体	兵庫県
------	----	-----	--------	------	-----

路線名	一般県道 周世尾崎線	所在地	赤穂市坂越～尾崎
-----	------------	-----	----------

事業目的	事業内容
<ul style="list-style-type: none"> 本路線は、国道 250 号や（都）新田坂越線等とともに赤穂市街地の骨格を構成する路線であり、市の都市計画マスタープランにおいて「生活文化交流軸」として位置づけられている。 しかしながら、整備前の幅員は 3.5m 程度と非常に狭く、尾崎地区から相生市方面へ向かうには大きな迂回（千種川を 2 度横断）を強いられ、また、中心市街地内を通過する国道 250 号へ交通が集中するなど、日常生活やまちづくり上の課題が生じていた。 赤穂市の「魅力ある交流都市づくり」を支援するため、当該事業により、赤穂市臨海部と相生市方面との連携強化、中心市街地内の通過交通の分散、観光地である御崎地区へのアクセス性の向上等を図った。 	道路改築事業 L=2,350m(内トンネルL=415m) 構造規格：3 種 2 級（平地部） 計画幅員：6.5（12.0）m(2車線+片側歩道) 着手前交通量：平日 800 台/12h(H17セガ) 休日 700 台/12h(H17セガ) 供用後交通量：平日 5,400 台/12h(H18.10.26) 休日 6,500 台/12h(H18.11.3) 負担割合〔国：5.5/10、県：4.5/10〕



事業期間	計画	-	事業費 (用地補償費)	計画	-
	実績	H8 年度～H18 年度		実績	約 44 億円

完了年月	平成 18 年 5 月	過去の評価
------	-------------	-------

<p align="center">事業を取り巻く社会経済情勢等の変化</p> <p>赤穂市の人口は近年横違い傾向であるが、観光客数は H12 年の 1.3 倍に増加している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 赤穂市の人口 H12(52,077 人) H18(51,585 人) [0.99 倍] 赤穂市の観光客数 H12 (1,470 千人/年) H18 (1,908 千人/年) [1.30 倍] 【赤穂市統計書】
--

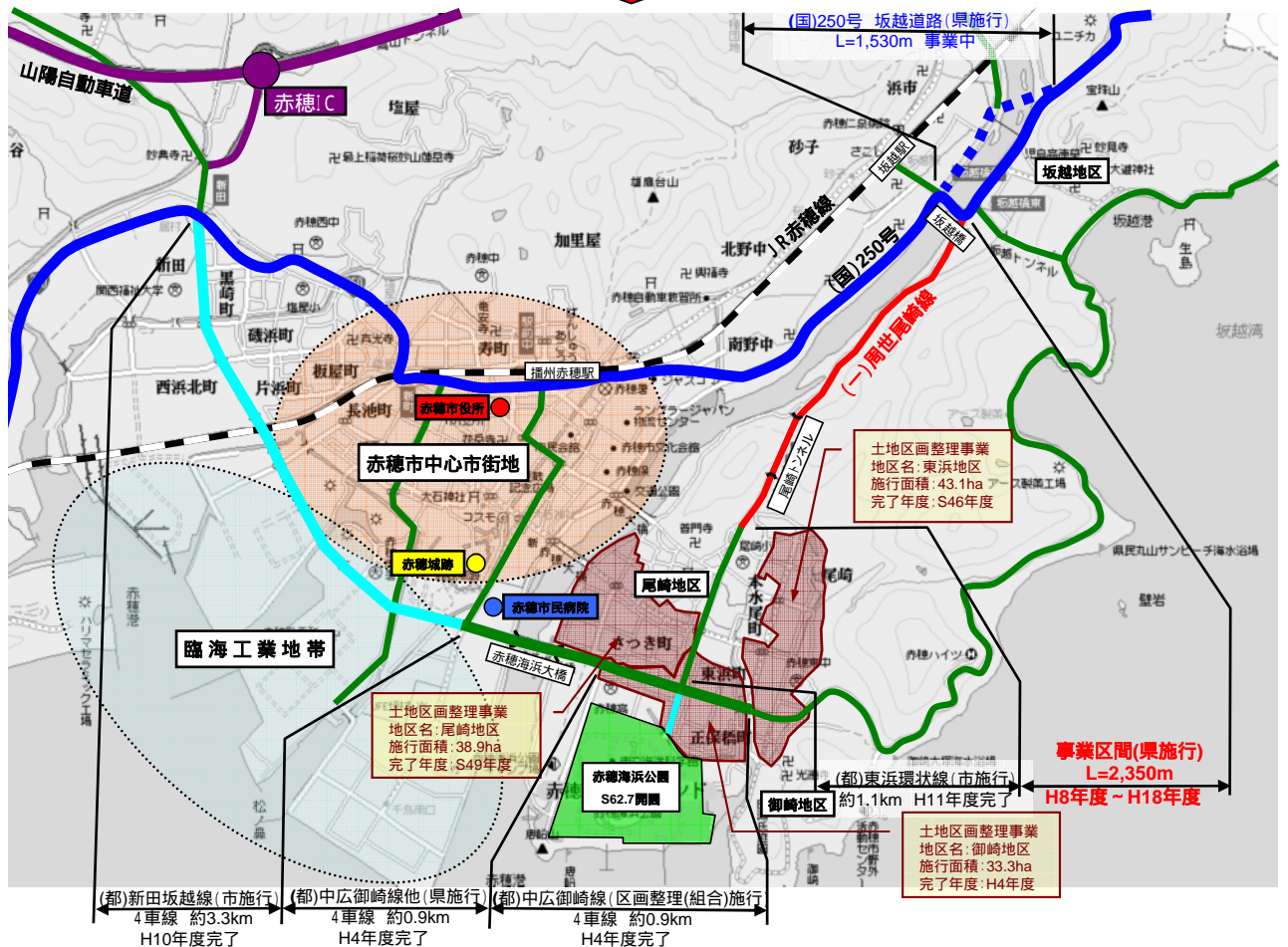
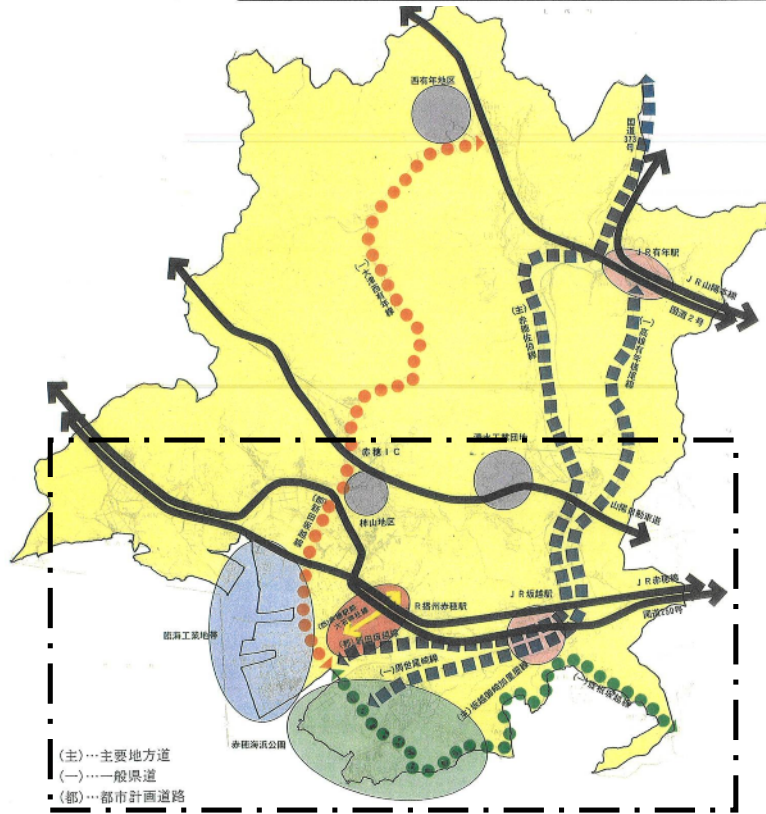
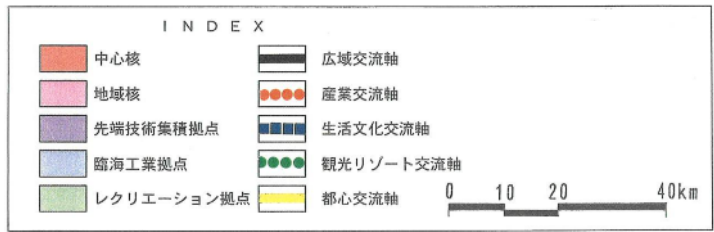
事業の効果の発現状況

想定した整備効果等	整備後の状況
<p>【直接効果】 赤穂市臨海部（尾崎地区等）と相生市方面との連絡強化</p> <p>中心市街地内を通過する国道 250 号の交通負荷軽減</p> <p>歩行者・自転車の安全性確保</p> <p>【間接効果】 赤穂市の観光活性化の支援</p>	<p>市施行の（都）東浜環状線との一体的な整備により、以下の効果が確認できた。</p> <p>千種川の 2 度の横断が不要となり、尾崎地区（海浜公園前交差点）と国道 250 号（坂越橋東交差点）間の所要時間が短縮されるなど、「生活文化交流軸」としての機能が強化された。</p> <ul style="list-style-type: none"> 距離 1.8km 短縮（整備前：5.4km 整備後：3.6km） 時間 3分短縮（H17：11分 H18：8分） <p>赤穂市の外郭を通る 4 車線の赤穂海浜大橋や（都）新田坂越線とネットワークすることにより、国道 250 号から当該道路への交通転換が図られ、中心市街地へ流入する交通が減少したとともに、坂越橋西詰交差点の渋滞が緩和した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国道 250 号 H17:7,900 台/12h H18:6,300 台/12h (1,600 台減少) 赤穂海浜大橋 H17:6,100 台/12h H18:8,800 台/12h (+ 2,700 台増加) 坂越橋西詰交差点通過時間 H16:4 方向それぞれで 1～3 分 H17:3 方向で 0 分、1 方向で 2 分 <p>自転車歩行者道の整備により、歩行者・自転車の安全性が向上した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 歩道整備に対し沿線住民の 7 割が満足。（H19.2 住民アンケート調査結果） <p>整備後の交通量は、休日（6,500 台/12h）が平日（5,400 台/12h）の 1.2 倍となるなど、休日には、観光・レジャーなど自由目的の車両が多く利用していると考えられる。（整備前 平日 800 台/12h 休日 700 台/12h）</p> <p>赤穂海浜公園来訪者の約 1/4 が「本トンネルを利用した」と回答しており、そのうち約 1/2 が「今後、公園に来る回数が増える」と回答。（H18.11 公園来訪者アンケート調査結果）</p>

事業実施による周辺環境への影響	
生活環境	尾崎地区では、区画整理事業や民間開発等により、市街化が進展し、今では良好な住宅地として成熟している。当該事業により、相生方面との連絡が便利になった結果、尾崎地区をはじめとする地域住民の約7割が「本事業により買い物など日常生活が便利になった」と回答(H19.2 住民アンケート調査結果)するなど、住宅地としての生活環境がより向上した。
特徴的な取組み	
<ul style="list-style-type: none"> トンネル照明に太陽光発電システムを採用し、年間電力量の約3割を太陽光発電で賄い、CO2換算で約3.7t/年の削減となった。(H19年度実績による) 本システムはトンネル坑口上部の空間を有効利用でき、比較的供給率も高いことから、地球温暖化対策への意識啓発の意味でも意義があると考えられる。(計画発電量：約10,000kWh 実績発電量(H19年度)：10,043kWh) 	
改善措置の必要性	
赤穂市臨海部の尾崎地区等から相生市方面へのアクセス改善、国道250号の交通負荷低減、歩行者自転車の安全性向上等の効果が確認できること、また、事業に対する沿線住民の満足度も高いことが確認できたことから、特段、改善措置の必要性はない。	
同種事業の計画・調査・事業実施のあり方、事業評価手法の改善等	
<p>市の地域計画と整合した道路計画の必要性</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の事業においては、市が目指す地域の将来像を明確にしたうえで、県と市が役割分担をしながら一体的に整備に取り組んだことで、まちづくりを効率的に支援することができ、市町のもつ地域計画との整合、市町との連携の重要性を再認識できた。今後の事業計画においても、地元市町と十分に協議をしながら、地域全体の将来像を見据えた計画策定をすることが重要である。 <p>資料蓄積の重要性</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回は、従前のデータが不十分であったため、H17 センサデータ(事業前)を活用することにより、事業効果の把握に努めた。 今後は、事業着手前、事業期間中の状況写真、既存データ等の収集、交通量や渋滞長などの実態調査をして、データ蓄積に努める必要がある。 <p>信号交差点新設による供用直後の国道250号渋滞悪化</p> <ul style="list-style-type: none"> 本事業により国道250号坂越橋東に新たな信号交差点を設置したところ、供用直後は、県道の交通量(6,700台/日)が予測(8,000台/日)を下回ったため、実態に応じた信号現示(主道路と従道路との青時間配分)とならず、国道の渋滞が増加し、利用者からの苦情が相次いだ。 直ちに公安委員会へ信号現示の見直しを依頼し、渋滞の緩和を図ったが、今後、信号交差点を新設する場合は、より精度の高い需要予測と供用直後の監視の必要性を再認識した。 また、国道250号坂越橋周辺の渋滞は完全には解消されておらず、今後、現在事業中の、国道250号坂越道路完成後の交通状況を見ていく必要がある。 	
整備前	整備後
	

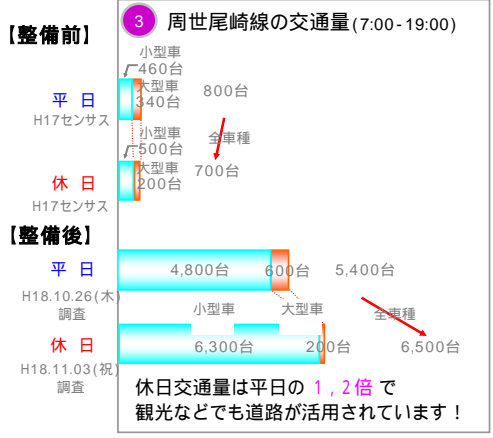
赤穂市の将来都市構造

赤穂市都市計画マスタープラン 平成9年5月

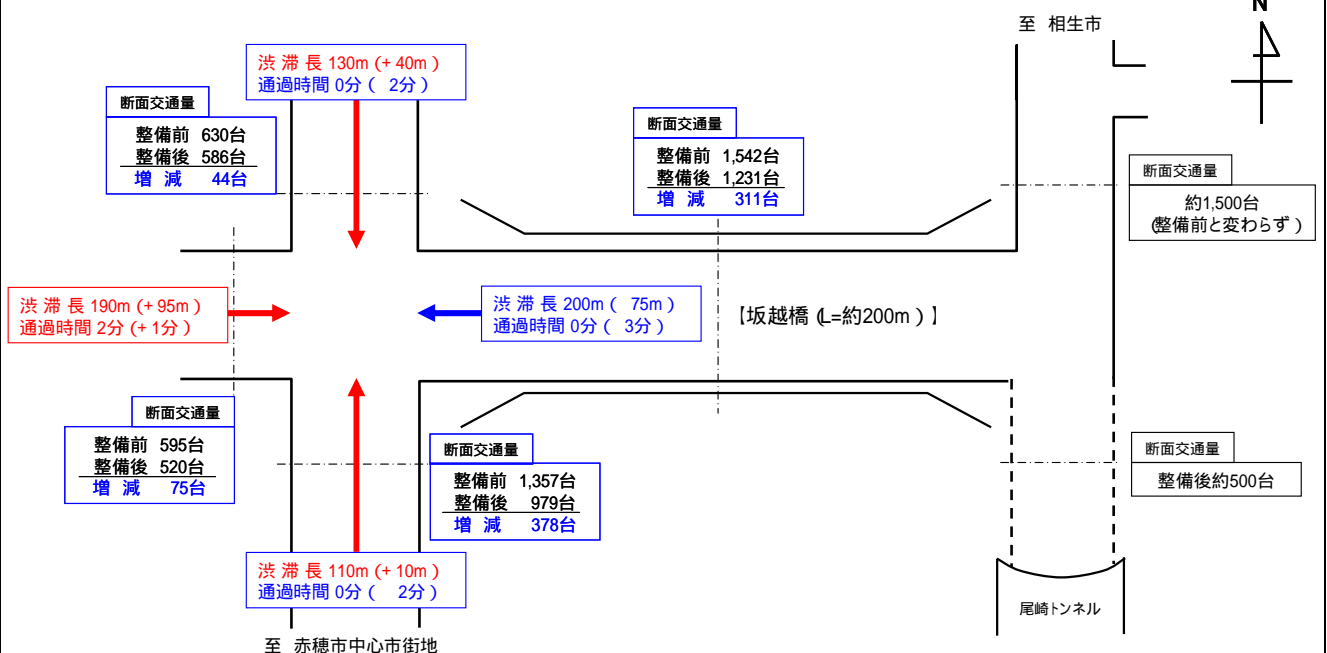




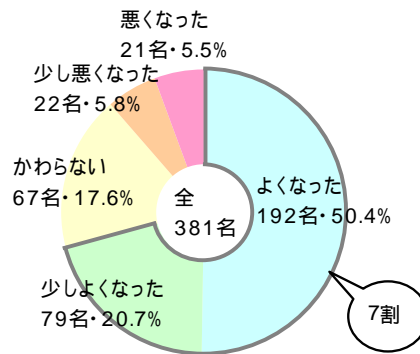
交通量観測結果 (整備前)平成17年度道路交通センサス
(整備後)H18.10.26(木)調査



坂越橋西詰交差点 渋滞調査結果 (整備前)H16年 7月2日(金)
(整備後)H18年10月26日(木)



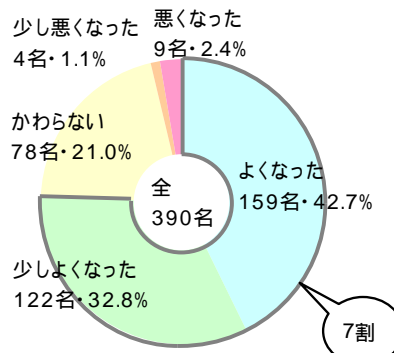
日常生活の利便性



尾崎・御崎・坂越地区住民

H19.2調査

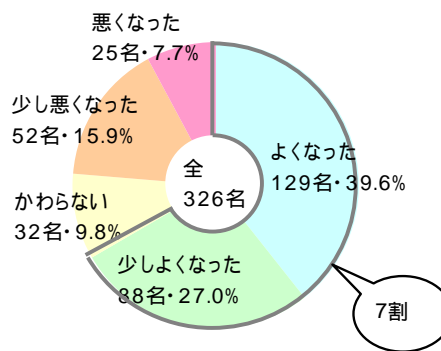
臨海部の観光拠点や産業拠点の利便性



尾崎・御崎・坂越地区住民

H19.2調査

徒歩や自転車での通行時の安全性



尾崎・御崎・坂越地区住民

H19.2調査

(参考) 当該事業地周辺の市街化の進展状況

昭和49年



昭和55年



平成20年

